

***** シンポジウム報告 *****

COP10 パートナースHIP事業 地球を考える 日本を考える 生き方を考える

自然との共生：アイヌのこれまでの生き方、これからの生き方

主催：多文化共生研究所&地域連携センター 共催：中部人類学談話会

協力：朝日新聞社、野外民族博物館リトルワールド

2010年1月22日 本学学術交流センター講堂にて開催

■第一部 ライブ：ユーカラ&トンコリ演奏 2：30～4：00

- 語り・ユーカラ：結城幸司
- トンコリ演奏：福本昌二

■第二部 フォーラム「先住民族と生物・文化多様性」4：20～5：40

- 山田 勇（京都大学名誉教授・日本熱帯生態学会会長）
「失われゆくアジアの森に生きる先住民族の選択」
- 本多正也（「シサム（良き隣人）を目指して」調整委員）
「アイヌの復権にかかわる近年の動向と連帯活動」
- コメント：結城幸司・福本昌二
- 座長：稲村哲也

■フォーラム参加者プロフィール

結城幸司：1964年釧路市生まれ。木版画家。「先住民族サミット・アイヌモシリ2008」事務局局長。世界先住民族ネットワーク AINU 副代表。2000年にアイヌ・アート・プロジェクトを設立。版画、舞踊、ライブ、講演を通してアイヌ文化復興・提唱活動を行っている。

福本昌二：1969年札幌市生まれ。知床ネイチャーガイド。木彫作家。2000年に結城幸司らと共にアイヌ・アート・プロジェクトを結成。全道トンコリ大会で4年連続優勝、審査員も務める。全国にトンコリを広めながら、ユーカラ語り部のサポートもしている。

山田勇：1943年京都市生まれ。京都大学大学院農学研究科林学専攻博士課程修了（農学博士）。これまで40年間、約120回にわたり世界の森を歩き、生態学的調査と共に森とその周辺に生活する人々の暮らしの変化を観察してきた。著書に『森と人のアジア』（昭和堂1999）、『アジア・アメリカ生態資源紀行』（岩波書店2000）、『世界森林報告』（岩波書店2006）など多数。

本多正也：1947年名古屋生まれ。県立明和高校出身。早稲田大学で雄弁会に所属し、ベトナム反戦、全共闘運動を担う。後に武装解放路線と決別し、市民自治・人権・環境をめぐる「新しい社会運動」を進め、アイヌと連帯し、市民グループ「シサムをめざして」調整委員を務める。主な著書に、『新左翼運動40年の光と影』（共著、新泉社）、『グローバルな市民社会と社会主義のメタモルフォーゼ』（グラムシ没後70周年記念シンポ報告集所収）など。

企画の趣旨

2010年10月に生物多様性条約第10回目締約国会議(COP10)が愛知・名古屋で開催される。また2010年は国連の定める「国際生物多様性年」である。さらに、2002年のCOP6(オランダ・ハーグ)で採択された「現在の生物多様性の損失速度を2010年までに顕著に減少させる」の目標年にもあたる。生物多様性条約にとって節目となる重要な機会である。

10月11日(月)~29日(金)の約3週間にわたって開催される会議には、国連関係者・各国政府関係者・NGOなど約7,000名が来訪すると推定されている。国際会議の主会場は名古屋市の白鳥国際会議場であるが、市民による各種事業が愛・地球博記念公園で開催される。

そこで、こうした機会に、本学の研究蓄積を活かし、生物多様性と文化多様性に係る国際フォーラム等を開催して、研究の集積と議論を展開するとともに、世界に向かって大きく発信することは、本学にとって大いに有意義なことであると考えた。本番は10月だが、その態勢固めを兼ねて、プレ・イベントの位置づけで実施したのが、この企画である。

北海道からお呼びし、ユーカラと伝統楽器トンコリを披露していただいたアイヌの結城幸司さんと福本昌二さんは、知床エコツアーなどを通して、環境保全とアイヌ文化継承の実践活動に携わっておられる。また、あとで述べるWIN-AINUのメンバーでもある。フォーラムで発表していただいた山田勇先生は、京都大学(東南アジア研究所)名誉教授で、熱帯生態学会会長の立場にあり、世界中の森とそこで暮らす先住民族の暮らしを見て来られた。山田勇先生には、今後のCOP10関連企画の学術的バックボ

ーンを中心になっていただくことをお願いし、今回のフォーラムでご発表いただいた。本多さんは、NPOグループ「シサム(よき隣人)をめざして」の(全国レベルでの連携を担う)調整委員として、「世界先住民族サミット」の実現などアイヌの活動を裏方として支えてこられた。

COP10と生物・文化多様性のアピール

生物多様性(環境)と文化多様性(文化)は、ユネスコがその2つの危機を訴えているように、車の両輪の関係にある。COP10に連動した企画は、その両輪の関係の重要性を重視し、その関係性の理論的な研究と両輪の保全のための道筋を示す実践をアピールすることである。世界各地の先住民族は、環境との共生の知恵を培い、今日まで伝えてきた。自然環境の破壊とともに先住民族の文化が失われつつあり、先住民族の文化の喪失は、地球の環境破壊に拍車をかける。先住民族の文化を再評価し、その文化の継承への取り組みを理解し、学び、連携し、活動を起こすことは、地球上のすべての人類にとって重要なことである。

そこで、COP10に際して、生態学、文化人類学、環境学などの研究に基づき、研究者だけでなく、先住民族を中心とする世界各地の実践活動家や生活者の方々と集い、「生物多様性と文化多様性」の関係性とその重要性、諸地域の環境と文化の特徴と現状について議論しあい、

「生物・文化多様性」の保全の道筋を模索し、にアピールし、発信することを計画した。

学術と実践についての議論を行うと共に、先住民族を中心としながら、「里文化」(自然との調和、豊かな人間関係、外部とのバランスのと

れた相互交流など)の文化表象としての、儀礼、民族音楽、民族舞踊のパフォーマンス、民芸品・民具の展示などを披露し、発表しあうこと大いに意義深いであろう。

「世界先住民族サミット」とその継承

上記のような企画を計画したのは、アイヌの方々が2008年の洞爺湖サミットの直前に開催さし、歴史的な成功を収めた「世界先住民族サミット」アイヌモシリ2008に参加し、それに触発されたからである(「共生の文化研究」2で報告)。「世界先住民族サミット」の実行委員代表として活躍した萱野史朗さん(「萱野茂 二風谷アイヌ資料館」館長には、2009年1月31日に中部人類学談話会と共催したミニ・フォーラム「先住民族アイヌの現在」でお話いただいた(「共生の文化研究」2で報告)。萱野史朗さんは、アイヌとして唯一人国会議員となり「アイヌ文化振興法」成立に尽力した萱野茂氏の息子さんで、お父さんの仕事を引き継いで、アイヌ文化の保存継承に努めている。

萱野史朗さんたちは、「世界先住民族サミット」の後、WIN-AINU(世界先住民族ネットワーク・アイヌ)を組織して、世界先住民族との連携を将来につなげていこうとしている。

2007年9月国連において「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択され、それを受けて、我が国でも2008年6月に「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院で採択された。こうした画期的な社会環境の改善の流れの中で、アイヌ民族がイニシアティブをとって、世界の先住民族に呼びかけて連帯することは、歴史的な意義があると言える。そして、私たちの立場としては、そうした連帯を支

持すると共に、彼らと連携して、生物多様性と文化多様性の保全のための学術的文化的活動を実践することは大きな意義があると考ええる。

「世界の里フェスタ」

10月に開催を計画しているCOP10関連企画では、世界各地から先住民族の方々をお呼びして、それぞれの地域の自然環境や文化とその現状を話し合い、文化的な交流を行うことを重要な内容と考えているが、それに私たちがどのような立場で連携するかということが課題である。それに関して、私は、2009年春に本学で開催して大いに盛り上がった「日本の里フェスタ」(朝日新聞主催)に大きなヒントを得た。私はフォーラムのコーディネーターとして協力したが、「フェスタ」運営の中心を担っていた日丸美彦氏が、こんどは「世界の里フェスタ」をやりたいと言い出した。

すでに述べたように、世界各地の先住民族は、環境との共生の知恵を培い、それを今日まで伝えてきた人びとである。そうした方向性の価値観を持った人びとの典型であるとも言える。しかし、そこで、「先住民族」の枠でくくることにより、価値観を共有する他の人びとを排除することになってはならない。そこで、頭に浮かんだのが、「世界先住民族サミット」と「世界の里フェスタ」の合体である。自然との調和、豊かな人間関係、外部とのバランスのとれた相互交流などを体現した価値観や生き方を「里文化」と名付けておきたい。つまり、COP10企画で目指すものは、「先住民族」と「非先住民族」の対立ではなく、「先住民的価値観」なるものの共有と相互交流のなかで、地球と人の未来を考えるという方向性である。

実感されたアイヌの新たな生き方

1月22日に開催した「自然との共生：アイヌのこれまでの生き方、これからの生き方」は、以上のような考えに基づいた「シリーズCOP10企画」の第一弾として、その基礎的な方向づけを模索するものであった。

実際、結城さんと福本さんによる語りとユーカラや伝統楽器トンコリの演奏は、単なる議論だけではなく、現代アイヌの生き方・考え方を、まさに生き生きと伝えるものとして、学生諸君を始めとする参加者の多くに感動を伝えたと思う。

この企画は、翌1月23日に、椋山女学園大学において「中部人類学談話会」主催で、どちらかというとフォーラムを中心に実施した。また、24日には、結城さんたちを野外民族博物館リトルワールドのアイヌ家屋展示などをご案内し、そこでもライブ公演を開催した。

3日間のイベントの後、結城さんから、メールで次のようなお便りをいただいた。



ユーカラの語りとトンコリ演奏
(本学の講堂にて)

“結城幸司さんからのお便り”

今回の旅は、私的には、体調は嵐、外の世界は晴天といったようなきびしく希望のある旅でありました。といっても、これを読まれた方にとっては、何のことやらとお思いでしょうが、原因のわからない腹痛に襲われて、せっかくの名古屋の旅が不安を抱えながら始めなくてはならなくなり、げんなりとしておりましたが、行く先々での新たな出会い、そして希望の持てる取り組みが、私の弱りかけた心を支えていたように感じます。

初日の愛知県立大学「自然との共生 アイヌのこれまでの生き方これからの生き方」という取り組みの中で、自分たちアイヌのことだけではなく、世界の少数民族、先住民族の素朴な世界の価値観を発表なされた、京大名誉教授の山田勇先生の実行動を伴ったお話に、行き過ぎた現代社会の問題点、特に経済中心社会の価値観が、環境や先住民族の生き方や人々の文化を変え続けている事への警鐘、そして穏やかな語り口によって語りだされる、地域で生きることへの価値観、「素朴主義」という言葉、それらすべてが、わかっていながらなかなか考えをまとめる事のできなかつた私にとって、目から鱗の発表でありました。まさに「素朴主義」を実践なさっているような山田先生の話口に、引き込まれるように聞き入ってしまいました

続いて発表なされた市民運動家である本多正也さん（グループ・シサムをめざして）の、時代をまさに社会運動の現実と共に歩いてこられた、実証的なお話も興味深く、その時代転換にあわせて、運動が変化し、それを受け止めてこられ

た人だけがもつ本物の言葉に、この日本という国の時代検証が行われたような気がします。

右だ左だという決めつけが嫌いな私にとって、時にその両方の翼の葛藤こそがこの時代を作り上げ、世界に稀な平和国の価値観を生んできたのを見させてもらったような気がします。

その後で求められたコメントで、私が「右翼でも左翼でも無く仲良くだ」と言ったのは、次の時代へと向かう自分のテーマとしての宣言になったのかもしれませんが。

すべての世界は オリジナルでつながり行く、バランスを見て行く考えこそが、行き過ぎる人間社会のつぎの発明に発進になって欲しいなというのが正直な感想です。

そして2日目のCOP10関連特別企画「先住民族の知恵に学ぶ自然との共生」（中部人類学談話会主催：愛知県立大学多文化共生研究所共催）のフォーラムも、アボリジナルの世界観を発表なされた、杉藤重信先生（椋山女学園大学）の先住民族社会への行きすぎた賛美への警鐘もうなずけるし、より詳しく発表なされた山田先生の報告も確信が持てたし、稲村哲也先生（愛知県立大学）の「山岳地域の生態と先住民族の伝統知」のアンデス地方の、現代を生きるオリジナル性を保ちながらも変化している先住民族の実態にも、自分たちらしく生き続けることの大切さを学べたような気がします。

本多正也さんの発表した 現実の日本における先住民政策の実態も、正直に、そして希望の持てる部分も、きっと皆さんには、詳細な情報を得る場所となったのではないのでしょうか。

僕は、神話の世界の大切さ、滅ぼしてしまった狼の語りから、自分たちも交えた現代の人間に考えるチャンスとなればいいと思い、つたな

いアイヌ語を交えたツイタク（アイヌの昔話）を伝え、現代の土地問題（廃棄物処理をめぐる）とそこに住む現地の人々と生き物の未来に対する考え方の警鐘を作品にした狐の物語のアニメの発表もできたし、受け止めてもらえたような気もしていますし、実り多いものとなったような気がします。

最終日のリトルワールドは、始めて訪れた場所でありましたが、これも驚きの連続で、中に展示された各国の風土に基づいた建設物のクオリティーの高さには、目を見張るものがありました。なんでこれほどのものを今まで知らなかったのか、悔しさを覚えるくらいでした。これは、中部地方の宝と言ってもいいのではないのでしょうか。学びと体験と遊びがバランスよく調和していました。ここでも、ツイタク、トンコリ演奏をさせてもらい、最後まで一般聴衆の皆さんも聞きいってくださりホントありがたく感じています。

それと何よりも驚いたのは、屋内の展示物の充実さここは何日も居たくなるほど芸術的で根源的な世界が魅力溢れておりました。ホントまた来たい。

体調も最後まで持ってくれて、なんとか名古屋での取り組みも無事終了でき、よかったよかった。本当に稲村先生をはじめ沢山の皆さんに感謝いたします。つぎは体調万全で名古屋に行きたい。つくづくそう感じて今回の旅の感想とさせていただきます。

おわりに

結城さんと福本さんには3日間にわたって、ユーカラとトンコリ演奏をしていただいた。フォーラムは本学と中部人類学談話会で開催し

た。本学開催では、とにかく多くの学生にアイヌについて知って欲しいというというのが第一の目的であった。学生たちから、「アイヌのことを知ることができてよかった。ユーカラヤトンコリに感動した。」という感想をもらうことができた。

談話会では、われわれ研究者と結城さんたちとの交流が大きな目的であった。そこで、山田先生、本多さんの発表に加え、談話会世話人の杉藤重信さんに「アボリジニーの現在：環境との共生は可能か」を発表していただき、稲村も山岳地域の生態と先住民族の伝統知を発表した。

発表だけでなく、懇親会も大いに盛り上がって、熱い交流ができ、結城さんたちから、「名古屋に来てよかった！」という率直な感想をもらい、たいへん嬉しかった。

たまたま、結城さんのお父さんは、アイヌ解放運動の闘士であって、その重要な活動の一つに、1972年、札幌医大で開催された「日本人類学会・民族学会（現文化人類学会）連合大会」の壇上を占拠し、研究者の傲慢な研究態度とアイヌ搾取を批判するという実力行使がある。文化人類学研究者にとっては、研究モラルの原点のひとつに位置づけられる人物でもある。中部人類学談話会メンバーである渡邊毅氏（椋山女学園大学教授）と和崎春日氏（中部大学教授）は、その学会に参加していたとのことであった。

その次世代に当たる結城幸司さんは、アイヌの価値観を再認識し、世界への発信しようと活動されている。そのために、われわれのような研究者を含め、広く交流することを重視している。その結城さんが山田先生や本多さんの考えを深く理解し、私たちとの信頼関係も作ってい

ただいたことは、今回のフォーラムの大きな成果であった。

野外民族博物館リトルワールドの野外展示場でアイヌ・コタンが1983年に建設された。そのとき筆者は、リトルワールドの研究者として萱野茂氏に建設の依頼に行ったという縁もある。それから30年近くが経ち、この2月にアイヌ家屋の母屋の建て替えを行ったが、その事業を請け負ったのが、萱野茂氏の息子さんの萱野志朗さんである。

萱野志朗さんと結城幸司さんは、「世界先住民族サミット2008」を、代表と事務局長の立場で担った方々で、現在、その事業を引き継いで設立したWIN-AINU（世界先住民族ネットワーク・アイヌ）の代表と副代表の立場にある。

このお二人と話し合い、COP10で「世界先住民族サミット」を本学で共同開催することを約束した。後日、WIN-AINU理事会で、そのことが正式了承されたとの連絡を受けた。

今回の小さなフォーラムの開催によって、今後の方向性が見えてきた。COP10関連事業の国際フォーラム等の開催までには、多くの困難も予想されるが、アイヌの方々を介した世界の先住民族の集いを、みなで企画・運営し、世界にアピールする議論と交流の場を共有できることは、大きな楽しみでもある。

山田勇先生と本多正也氏のフォーラム発表、及び結城幸司氏のコメントと語りの概要を次ページ以降に掲載する。内容については、フォーラムを主体として開催した、2日目の中部人類学談話会での発表をベースとした。

（稲村哲也記）